

市制102周年を迎えた大いなるトカイナカ!! 中核市移行を機に図る一宮流・持続可能なまち

市制施行100周年と中核市への移行が同時期に実現

尾張国一之宮(真清田神社ますみだ)に由来する市名を持つ愛知県一宮市は、平成17(2005)年4月1日、旧一宮市・尾西市・葉栗郡木曾川町の2市1町の合併(尾西市と木曾川町が一宮市に編入)により、新生・一宮市としての歩みを開始した。

合併直後の人口は37万7216人(令和5/2023年12月1日現在37万8620人)。大都市制度の一つ・中核市の要件(人口規模30万人以上)も、この時点で満たされた。旧市時代の平成14(2002)年度以降、特例市として地方分権に積極的に取り組んできた一宮市(合併時の人口28万5550人)は、新市スタートとともに、近い将来の中核市への移行を、より具体的な形で視野に入れることになったと言える。

平成26(2014)年5月の地方自治法一部改正(特例市制度の廃止など)で、中核市の人口規模の要件は30万人以上から20万人以上へと緩和されるが、そうした動きと関わりなく、名古屋市と岐阜市の中間に位置する、尾張地域(※愛知県北西部、木曾川流域の濃尾平野や尾張丘陵に分布する14市4町で構成。人口総数は愛知県の4分の1を占める188万人強)の中心都市として、合併以前から既に大きかった一宮市の存在感は、合併でより高まることになったのだ。

また、新生・一宮市の基盤を成す旧一宮市が市制施行したのは、大正10(1921)年9月1日のこと。令和3(2021)年度が市制施行100周年に当たることから、一宮市では平成30(2018)年に、中核市への移行目標を「市制施行100周年との同時実現」に定めたことを公表し、中核市への準備を着々と進めていく。

令和3年4月1日、コロナ禍の影響によ

なかのまさやす
中野正康
一宮市長

る各種制限が実施され、事業進行など

にも何かと遅滞が生じがちな状況下

にありながら、一宮市は中核市への移行を目標通り実現する。これは尾張地域における初の事例(愛知県内では4番目)だった。

これら一連の事業をけん引し、実現に導いたのは中野正康一宮市長だ。本欄では、令和5年10月18日に一宮市を訪問。県内多数の交通の要衝、世界的レベルの繊維産業のまちなど、多彩な顔を持つまち並みや、現在進行形の地域活性化施策の成果を体感



令和3年9月1日に举行された「一宮市制施行100周年記念式典」の様相（中核市への移行式は同年4月1日開催）



中核市への移行により保健所業務が権限移譲され、市民サービスの向上につながった（一宮市保健所）

それを實現していくことが、ひいては、地場産業の振興を含めた地域の活力を改めて醸成し、持続可能なまちづくりへとつなげていく道でもあると、私は信じております」

そう語る中野市長は、旧尾西市に生まれ育った。大学を卒業後、平成2（1990）年に旧郵政省に入省。放送行政局にてメディア関連の業務を中心に担当した後、南カリフォルニア大学に留学、欧州連合日本政府代表書記官としてブリュッセル（ベルギー）にも約3年間駐在した。帰国（平成20／2008年）後は、総務省情報通信国



するとともに、中野市長に「これからの100年のまちづくり」を中心に、お話を伺うことができた。

「この大きな節目の時期に市長職にあるということ自体が、非常に光栄なこと、合併を実現された谷一夫前市長をはじめ、旧尾西市や木曾川町を含めた現一宮市の基盤を100年近くにわたり、培ってこられた先達の皆さまに、まずは心より感謝を申し上げたいと思います。同時にこれを一つの契機に、本当に自分でも思うところがたくさんありますので、少子高齢化、人口減少が不可避の今の時代に、持続可能な一宮市を実現するための『新しいまちづくり』を、より積極的に実践していきたいと考えております。

では、私の考える新しいまちづくりとはどのよ

うなものなのか。改めて端的な表現をいたしますと、それは老若男女を含め、誰もが住みたい、住み続けたいと思えるような一宮市をつくっていくことに尽きます。当たり前過ぎるかもしれませんが、逆に当たり前のことだからこそ、しっかりとそれを実現していきたい。

わが国にとって『これまでの100年』は、間に戦争や戦後復興、さらに高度経済成長時代から低成長時代へという流れもあり、経済的に勝つことがとかく第一目標とされがちな時代だったとも言えます。しかし、人口構造も経済構造も成熟化した状況下で迎える一宮市の『これからの100年』は、顧客満足度ならぬ市民満足度をいかに高めていくか。それが重要なテーマになっていきます。

際戦略局や情報流通行政局などで要職を歴任。平成23（2011）年から約1年間の民間企業・博報堂への出向を経て総務省を退職し、平成27（2015）年2月1日実施の一宮市長選挙に出馬、当選した。令和6年で3期10年目を迎えている。

シビックプライドの源泉としての尾州ブランドの世界発信

「1期目は主に、国が『人口減少社会における地方創生支援』を推進する流れの中、『一宮市まち・ひと・しごと創生総合戦略』を策定・実践するなど、地域創生への基盤整備を多方面で図りました。

2期目に入って3年目の令和3年度に実

施した市制施行100周年の記念式典（9月1日）と中核市への移行（4月1日）については、前年度から本格化したコロナ禍の影響を受け、なかなか大変な局面もございました。特に愛知県から多くの仕事を引き受ける、中核市への移行は、『保健所業務』の引き継ぎで非常に困難を伴うことになりましたが、愛知県に人材の一部支援をお願いしたり、医療関係者の皆さまのご理解・ご協力をいただいたりしながら、職員たちの踏ん張りですべて通り、移行を実現することができました」

令和5年2月から3期目に入った中野市長は、少子高齢化・人口減少が不可避の時代背景の中、これからの100年に持続可能なまちづくりを進めていく上で不可欠な要素として「市民によるシビックプライド（郷土愛）の向上」をまず挙げる。また、市民を中心に、まちづくりの重要事項はみんなが決めるという意識改革や、細部をゆるがせにしない、誰も取り残されない取り組みなどの重要性についても、インタビューで再三触れられたのが印象的だった。

一宮市が現在展開しつつある、シビックプライドを向上させるための代表的な事例には、「毛織物の世界三大産地・尾州」として、一宮市を軸に尾張地域で盛んな繊維産業のさらなる振興と、世界への発信（ブランディング）事業がある。

「一宮市（旧一宮市・尾西市・木曾川町）を

中心とする尾州地域は、1300年ほど前の奈良時代から続く繊維産地です。中でも毛織物に関しては、現在、イタリアのピエラ、イギリスのハダースフィールドと並ぶ『世界三大産地』の一つに数えられています。

近世までは麻織物、絹織物、綿織物が生産の中心で、明治時代後半から、毛織物産地としての体制が整って

いきます。毛織物も当初の和装向け毛織物の生地生産から、大正・昭和前半期には洋装生地としての毛織物の生産が中心となり、現在に至ります」

一宮市を中心に、尾州地域は現在、共同で『尾州ブランド』の発信に努めている。その拠点は、中野市長が理事長を務める《公益財団法人一宮地場産業ファッションデザインセンター》（FDC）だ。

「FDCは尾州だけでなく、尾張地域全体の地場産業を振興するため、国・愛知県・一宮市など現14市町村の圏域・18業界団体の共同で、昭和59（1984）年に設立されました。つまり、圏域内全ての地場産業の振興を担っています。事業の中心は尾州の繊維産業です。繊維関係の展示会の開催や世界に進出するための独自のテキスタイル開発などプロダクト事業の推進、人材



一宮地場産業ファッションデザインセンター（FDC）のロビー。地場産の繊維製品の展示とともに商談もできるスペースになっている



毎年春と秋に東京・原宿で実施されているFDCのプロモーション事業「Bishu Material Exhibition」は尾州ブランド恒例の公式展示会

（次世代）育成事業、各種プロモーション事業など、多角的に実施しています。

近年は特に、ブランディングのためのプロモーション事業に力を入れています。例えば日本のファッションの流行発信地・原宿で、春と秋に展示会を実施しているほか、国内外で開催される繊維・ファッション関係の各種展示会へも積極的に参加するなど、尾州ブランドの発信活動を、より多彩に実践しつつあります。

特に本年（令和5年）11月11・12日には、一宮市としては史上最大級のファッションフェスタとなる《東京ガールズコレクション（TGC）地方創生プロジェクト》を中心に、アート、フード、その他のファッションイベントなどを、中心市街地で複合的に行う『BISHU FES. / 尾州フェス』を初開催します」

『BISHU FES. / 尾州フェス』の模



大正・昭和・平成を生きた洋画家・三岸節子像(旧尾西市出身)と作品を多数所蔵の一宮市三岸節子記念美術館(生家跡)。ギザギザののこぎり屋根は三岸節子の生家・繊維工場の明かり取り窓の再現だ



様については、後に触れるが、ここで一つ、繊維産業のまち・一宮市ならではのDNAが強く感じられる「ささやかだけれども、画期的な取り組み」(中野市長)を、ご紹介しておきたい。それは令和2(2020)年度から3年度にかけて準備され、令和4(2022)年度に実現した、市内公立中学校19校における制服改革事業「みんなの制服プロジェクト」だ。

一宮市の公立中学校の制服は長年、男子は詰襟学生服、女子はセーラー服を採用してきた。



高さ138mのアーチ式展望タワー「ツインアーチ138」は国営木曽三川公園内「138タワーパーク」の目玉。138は「一宮市」の市名に由来する

「大人たちによる論議と同時並行して力を入れたのが、制服を着る当事者の中学生、中学校に入れば自分たちも制服を着ることになる小学生たちからの徹底的な意見の収集です。具体的にはアンケート調査や、中学生たちの意見を直接聞いたための『中学生い

未来予想図は交通の要衝にしてウォークアブルなトカイナカ

た。しかし、時代の変遷につれ生じつつある気候変動、性別に対する受け止め方の変化などへの対応策の一環として、繊維産業のまちらしく「制服の改革」に着目した。

まずは学識経験者、臨床心理士、繊維技術研究者、保護者、教員などで構成する「みんなの制服プロジェクト」会議を設立。学生服も表現手段の一つとの観点から食育ならぬ「服育」の充実、地場産業の繊維業を媒介に図る「シビックプライド」の喚起・醸成、制服の持つ購入費用や管理のしやすさなどからの観点による「保護者負担への配慮」の3点を軸に、制服改革の論議を開始した。



一宮市は喫茶店の名物・豪華モーニングサービスの発祥地とも言われている。喫茶店を打ち合わせの場に頻繁に使った繊維産業従事者へのサービスとして発展

ちのみや《夢サミット》』『みんなの制服プロジェクトシンポジウム』などのイベントを随時開催するなど、小中学生の本音の意見を集めました。

そうした過程を経た上で、新しい制服をブレザータイプ(スカート・スラックス・キュロットの選択制)と定め、中学校の生徒会役員に集まってもらって、最終的に4パターンの試作品をセレクト。それらを市内の全公立小中学校(61校)に持ち回りで直接見てもらい、最後は全小中学生の投票で、デザインを決めました」

中野市長は、同事業の最大の意義を「制服を着る当事者の子どもたちを中心に、大人たちとの活発な意見交換を経て、みんなが新たな制服を決めたことにある」と語る。さらに、

自分たちで選んだ制服の生地生産やデザイン、縫製が最大の地場産業として実施されている事実を通じて「具体的に実感されることになるシビックプライド（郷土愛）の貴重さ」（中野市長）は、言うまでもないだろう。

加えて、この事業の副次的効果として、「例えば全国的にも問題になっている無意味な校則（服装に関する過度の規制など）を、校側や生徒たちが自発的に見直すための契機、自分たちに関係することは自分たちで決めようとする子どもたちの自立心の醸成のきっかけなどに、今後なっていくことも期待しています」と中野市長。

「これからの100年のまちづくり」に不可欠な要素として、中野市長が重視する「シビックプライドの向上」を軸に、市民を中心にまちづくりの重要事項はみんな決めていく意識改革、細部をおろそかにしない、誰も取り残されない取り組みなどの大切な要素が、「みんなの制服プロジェクト」には全て含まれていることが分かる。まさに「ささやかだけれども画期的な事業」と言える。

余談になるが、シビックプライドの向上という意味で近年、一宮市のヒーローになっているスポーツ選手に、車いすテニスの小田凱人選手（一宮市出身17歳）がいる。小田選手は市内の中学校を卒業して1年後の2023年全仏、全英（ウィンブルドン）で優勝し、今や世界ランキング1位の常連だ。中野市長も「だれもが自分らしく活躍できる

まちを目指す一宮市にとって、小田選手の活躍は、まさにシンボリックな事例と言えます」と絶賛する。

さて、世界的な繊維産業のまち・一宮市は、一方で、古来知られてきたように愛知県の中でも有数の交通の要衝でもある。

JR東海、名鉄名古屋本線および尾西線などの鉄道路線、名神高速道路、東海北陸自動車道、名古屋高速16号一宮線、国道22号および155号などの幹線道路が、市域を縦横に走る交通環境は文字通り「至便」の一言。県都・名古屋市および、岐阜県の県都・岐阜市からも鉄道で最速約10分、名神高速道路や東海北陸自動車道の市内ICからは15分以内で、中心市街地に到達する。

加えて現在、一宮稲沢北IC（東海北陸自動車道）が開設され、名岐道路の整備、名神高速道路・尾張一宮PAへのスマートICの設置検討、木曾川に架かる濃尾大橋の渋滞を緩和する新濃尾大橋（仮称）の架橋事業、名鉄荻安賀駅付近の鉄道高架事業ほか、交



「ツインアーチ138」展望室から見る雄大な木曾川



尾張一宮駅前ビル「i-ビル」内には、市立中央図書館、中央子育て支援センター、市民活動支援センターなどの公的施設が数多く入居

通インフラ再整備の大型プロジェクトが、同時多発的に進められている。

こうした交通インフラの再整備に付随して、一宮市内には現在、「物流関係の拠点施設が次々に設置されつつあるほか、企業進出の問い合わせが非常に増えています」と中野市長。

「交通インフラの再整備には、地域活性化の多彩な種が含まれてきますが、一方でその効果をきちんと享受するためにも不可欠なのが、中心市街地の軸を担ってきた商店街の衰退などによる、市内の回遊性の欠如からの脱却、新たなきわい・回遊性の創造です。

高速交通網の拡充で、市内外を結ぶルー

一宮市

(愛知県)

市 政 ル ポ

トは、より多彩になっていきます。また、一宮市の最大の都市核である一宮駅周辺は、建物容積率が400%から600%へと規制緩和されたため、駅周辺のビル建設は今後、さらに活発化していきます。課題になっているのは、その間をつなぐ駅から中心市街地への人の流れ、回遊性をいかに図っていくかということにあります。

名古屋市と岐阜市の中間点にあるベッドタウンとして、人口をある程度維持できたとしても、中心市街地を歩く人が減少する現状が改善されなければ、本当の意味での活気は生まれません。それは一宮市全体の活性化の低下にもつながります。その懸念を払拭するため、また市民満足度を向上させるためにも、ぜひとも必要なのがウォーカブルなまち(歩いて楽しいまち)の実現な



令和5年11月に中心市街地で開催された尾州フェスは、一宮市のブランディング事業



尾張国一之宮「真清田神社」の例大祭「桃花祭」(4月3日)は一宮市の春の風物詩

のです」

先に触れた、『BISHU FES. / 尾州フェス』こそは、中心市街地に人々の回遊性を復活させるための試金石ともなる、「生きた実証実験」と言える。報道によると、普段は人出の少なさが目立つ本町商店街(真清田神社参道・本町通り)をランウェイに、東京ガールズコレクションがプロデュースした衣装、地元の服飾デザイン専攻の学生たちが製作した衣装によるファッションショーが華々しく開催され、市内外から多くの観衆が詰めかけた。また、尾張国一之宮(真清田神社)の門前町として栄えた時代からの伝統を持ち、一宮市が全国発信を目指す「和菓子」の売店ブースも好評を博した。

さらに、一宮市はJR尾張一宮駅から尾州フェスが開催された銀座通り、本町通りの周辺エリアで、尾州フェスの1週間前(令和5年11月3〜5日)に、中心市街地の回遊性・滞在性の向上を目指すため「まちなかウォーカブル社会実験〜ストリートチャレンジ」を実施。これにもまた、多くの市民が参加し、「周辺を回遊して、一宮市のこれからの100年



中心市街地の回遊性・滞在性の創造を目指す「まちなかウォーカブル社会実験〜ストリートチャレンジ」(令和5年11月3〜5日)も尾州フェスと同様、尾張一宮駅前の銀座通りから本町通り周辺を中心に実施された

をみんなで作る契機とする実証実験」(中野市長)となったことが、各種報道からもうかがえる。

「第2期一宮市まち・ひと・しごと創生総合戦略」のサブタイトルは『トカイナカ』で子育てにやさしく安心して暮らせるまち」。木曾川が育む自然豊かな環境下にある一宮市では、繊維産業に加えて都市近郊農業も盛んだ。前述のように名古屋や岐阜から最短約10分の利便性も併せ持つ。中核市として「次の100年に向けた歩み」を開始した一宮市の未来予想図のベクトルは、まさに「交通の要衝にしてウォーカブルなトカイナカ(都会+田舎)」の構築に向けられているのだ。

(取材:文||遠藤隆/取材日||令和5年10月18日)